自刃，誅殺，人質殺し――『オレステス』という悪夢

吉武純夫

前書き

Orestes と Elektra の死刑がほぼ確実という状況(48-51)で始まるこの劇は，死ななくてはならないという状況にどう対処するかという問題で貫かれており，Orestes たちはその中で迷走する．自刃，誅殺，人質殺しというのは，彼が目指し，いずれも果たさずじまいとなる一連の行動である．民会で死刑を宣告された彼らは，名誉のために自刃することを願い出て挙行しようとしていたが(1060-64)，親友 Pylades の提案により，死ぬ前に Helene の殺害を試みることを決意した(1098-1176)．しかし，劇終盤の屋上シーン(1567-1624)で Helene 殺しが叶わなくなったと悟った Orestes は，自害するつもりではあるがその前に，代りに人質として捕えていた Hermione を殺そうとする．彼はそういう素振りを，少なくとも Apollon に制止されるまで貫く．

この最後の事態はきわめて醜悪だが，Helene 殺害を提案した時の Pylades の言(1147-52)を思い起こさせる．というのは，彼はそこで，大義ある Helene 誅殺が叶わないならば生きているつもりはないと言い，そうして自害することがいかに立派なことかを雄弁に語っていたからである．Orestes もそれを聞いて絶賛していた．しかるにその後の Orestes は，捕まえた Helene に隙を見せて逃げられてしまい，屋上に現れると，死ぬつもりではあるがその前に，Helene の代りに捕えた人質を殺さずにはおかぬという．自害するという限りにおいて彼は Pylades のかの言の通りに動いているようだが，しかしその態度は Pylades が見せていた一途さや潔さとは対照的なものであるように思われる．意図的に設けられたに違いないこの対照に私たちは何を見るべきだろうか．劇のこの仕掛けは，このあたりのことを考えてみるようにと我々に求めているように思われる．この劇の中に世相への批判，神話への批判，文学的な遊びなどを見ようとする研究者が多いが，この劇が強く訴えてくるものは他にあるのではないか．私は，名誉や生死や復讐に対する Orestes の態度の変化にまず目を向けて，それ自体が何を語っているのかということを考えてみたい．

1. 問題

問うべきことをもっとはっきりさせよう．私が意図しているのは，Pylades が 1147-52 で語っていたことに照し合わせて，いくつかの時点における Orestes の振舞いの正体を明らかにし，Orestes の態度の変化が劇全体の中でどのように批判されているかを考えることである．死刑判定を受けて自刃を決意し Pylades に別れを告げる(1068)までは，

Orestes の態度は，1060-63 に典型的に言明されているように単純で分りやすい．しかしそれ以降の Orestes の態度は単純明快ではない．そもそも，彼に Helene 殺しを勧めるために Pylades が語る言葉(1147-52)が，詭弁にも見えて真意をつかむまでにいくらかの努力が要る．またそれを聞いた Orestes が Helene 殺しを決意する時の思いを語った言葉(1163-72)にも，すんなりとは理解しにくい点がある．そして，屋上に現れた Orestes が Hermione を殺そうとするのも，単に復讐のためだけとは考えにくい．最初に必要なのは，これらの点について，テクストから分ることをはっきりさせて，Orestes の態度がどのように変様したのかを確認することである．とくに吟味を要することは，次の 3 つの点である．

① ＜Pylades は Helene 殺しへの思いをどのように語っていたか＞

Pylades は Orestes に，Menelaos への復讐として Helene 殺しを持ちかけるが，それは全ギリシア人の敵ともいえる Helene を誅殺することだとして，自身のそのことへの熱意を示す．彼の説得のクライマックスをなす 1147-52 の部分は，要するに「Helene 誅殺を試みた上でならば，助かることも自害することも立派なことだ」というものであるが，2 節で詳しく検討するように，このパッセジには我々をして考え込ませる点がある．というのは，Helene 誅殺ができないならば館に放火して自害するということを，カロスな死に方だとしているからだ[1]．カロスなる死とは通常，戦死の如く命を賭けた取組みのなかで最後まで力を尽くしながら死ぬことを言い，みだりには用いられない言い回しであった[2]．それに対してここでは，企てが失敗した時点で自ら命を絶つことをカロス死だと申立てているのである．その申立ては真に受けてよいものであろうか．そのように命を軽んずることは是認されるだろうか．そのような怪しい申立てをした(させた)のは，修辞的詭弁に過ぎないだろうか[3]．それに 781 でのカロス死モチーフの使われ方も参照して考える必要があろう．また，Pylades が誅殺への自身の思いを語ったことがこの劇の中でどんな働きをしているかということも考えなくてはならない．)

②＜Orestes 自身はどういう考えをもって Helene 殺しを決意するに至ったか＞

Pylades の熱い提案を聞き終えた Orestes は，すかさず相手を絶賛する(1155-62)．しか

---

[1] καλός という語(およびその派生語)には，大まかに分けて，beautiful(感覚的領域にせよ倫理的領域にせよ感動を呼ぶようなすばらしさを表す)という意味と，fitting という意味があると言える．これについては吉武(2002)，7-9 を見よ．しかるにこの劇では，カロス死をいう場合以外でも，それが一般的な適切さを表す場合(467，893，1105)や，正義とは違う観点から見た適切さを表す場合(194，417)や，巧妙さを表す場合(1093, 1131)が交錯しており，とくに 819 では‘τὸ καλὸν οὐ καλόν’（カロン(巧妙)なことはカロン(適切)でない）などという逆説もコロスによって歌われている．この劇ではこのように，カロスという概念が注意深く使用されていると考えられる．それゆえなおのこと，カロス死というモチーフの使用にも我々は注意深く当たらなくてはならない．

[2] Tyrtaios, Fr.10, 12 West および吉武(2007), 103 を見よ．

[3] Arrowsmith, 108 はここにデマゴギーを見る．Schein, 62 はこの申立てを anticlimax だという．ここでのカロス死申立ての意義については West ad 1152 も否定的である．

し彼が Pylades の発言・振舞いのどういう部分に賛同したのかはよく分らない．すぐあとに彼自身の思いと Helene 殺しの決意を語る言葉が続くが，注意を要するのは 1169-72 の部分である．彼はそこで，＜自由人らしく死にたい＞という意向と＜Menelaos に復讐したい＞という意向とを並行して述べるのだが，二つの意向にどんなバランスがあるのかは分りにくい．彼は誅殺という大義には触れないが，Menelaos に復讐するに当たって義を守る意思がどれだけあるのか疑問に思われる．この問題については，様々なテクスト解釈が提起されてきたが，セリフの流れを説得的に説明できる論理をきちんと考えてみることが必要である．また，「自由人らしく死ぬ」とはどういうことかは曖昧であり，彼がどういう死に方を思い描いてこう言っているのかもつかみにくい．そこまでに示されていた Orestes の名誉意識がどれだけ維持されているのかが問題となる．

③＜屋上の Orestes が頑なに人質を殺すと言うのはどうしてか＞

Helene 殺しを決意した Orestes は，Elektra からの提案を容れて，Hermione を人質として捕獲する．しかし彼は Helene 殺しに失敗したことを悟ると，Hermione 殺しに転じる．Hermione を殺すというのが無罪放免を要求するための騙りである可能性もありうるが，彼は無罪放免を要求することにもさほど熱心ではなく(1610-20)，亡命を提案されても拒み(1593-94)，その代りいわば執拗に，Hermione を殺すと繰返し言う(1578, -86, -96)．しかしなぜ Hermione を殺そうとするのか．彼女を殺せば Menelaos を苦しめることができるのは明らかだから，彼への復讐のためにであると考えやすいが，Menelaos のしたことに比べるならば，殺すいわれの乏しい Hermione を殺すのはいかにも法外なことだと思われる[4]．彼が Hermione を殺そうとするのは，Menelaos への復讐心からだけではないのではないか．屋上の Orestes を支配しているものは何なのか．

以上の３点をよく吟味すると，単純明快ではないものの，この劇のテクストは Orestes の内的変化を濃厚に示唆していることが見えてくる．

ところで，これらのことについて従来どんな考察がなされてきただろうか．もちろん，屋上シーンでの Orestes の行動は問題視されてきた．しかしこれまでになされた議論の大方は，この問題行動の原因を，性悪な仲間の唆し，縁者の薄情と悪意，腐敗した民会などに求め，それに対する作者の批判的意図を主張するものであった[5]．それらの多くは間違っているわけではない．しかし，上で指摘したような Orestes たちの内面にかかわ

---

[4] Mullens, 156: 'beyond control'; Pohlenz, 418: 復讐欲に支配されていて非道と評する; Wolff, 354: 'impulse of vengeance'.

[5] 性悪な仲間の唆し：Pohlenz, 418; Parry, 339, 342; Burkert, 108．縁者や世間の薄情と悪意：Falkner, 295-96, 299; Porter, 92; Komorowska, 44-45．腐敗した政治：Porter, 53, 88．世相に乗じた行動：Wolff, 353; Burkert, 107-08．ただし Porter や Komorowska は Orestes のかの行動は責めるに当たらないと言っている．Orestes の中に変化を認める者には，二つの考え方がある．劇中で堕落していったと言う者：Pohlenz, Mullens (ほか多数)，途中で仮面が剥がれて性悪な本性が露呈してくると言う者：Conacher, Schein．詳しくは４，５節を見よ．

る問題は誰からも見過ごされてきたといっても過言ではない．Orestes の「堕落」を言う者も[6]，それがどんな内容・性質のものとして描かれているかには触れぬままであった．本稿では，その変様の正体を見定めたい．そしてその上で，この劇が何を問題視しそれによって何を言おうとしているのかを考える．

以下に，議論の手順を示す．２節では，①の問題を中心に Pylades の言い分を検討し，３節では，②の問題を中心に Orestes が復讐を決意するまでの間にどのようなことを考えていたかを検討し，４節では，③の問題を中心に Orestes が屋上で見せている態度を検討する．５節ではそこまでの検討結果を照合して変様の原因を探り，最後に６節で，人質殺しをしようとしていた Orestes に Apollon が実質上の無罪放免を言い渡すとはどういうことなのか，ということを考える．

２．Pylades の言い分

ではまず，Pylades がこの劇で表している意図をはっきりさせたい．彼は 1152 を過ぎるとほとんどダンマリ役と等しくなり Orestes に従うままとなるが，それまでは Orestes に重要な助言を繰り返す．少なくともその間，彼の示す態度に，変化はないと言っていいだろう．

彼は Orestes に，まず民会に出向いて助かるための抗弁を試みることを勧めるが，死刑が確定して Orestes が自害の準備をするのを見ると，Helene の殺害を提案する．その時，これは公敵の誅殺であるとして，もしこのことが叶わないならば，自分は生きていたいとも思わないから，館に放火して死んでしまうつもりだと言う．そのうえで，もし叶えば民衆に称えられて死罪を免れることが望めるし，失敗してもそうして自害するならばカロスに死ねると主張する．

このとき，提案の出発点は，タダでは死にたくない，Menelaos に復讐したいという心情だった(1098-99)．しかし彼は，これは誅殺だからこそ正当化されるのであり，もっとまともな女を殺すのは恥ずべきことだという認識を語ることも忘れない(1133: δυσκλεὴς ... φόνος)．

Pylades の言い分のどの点が Orestes を動かしたのかははっきりしないとしても，Orestes が彼を絶賛するのは(1155-62)，たしなめも含めた彼の提案全体を聞いてのことである．そしてその演説の悼尾を飾るカロス死の申立ては，Orestes らが少なくとも立派な死を遂げられるという見込みがあることを宣言するもので，劇中に最も明るい希望の光を投じる重要な局面である．

しかし，その演説のエッセンスとも言うべき最後の６行(1147-52)は，我々に立ち止まって考えることを余儀なくする．

---

[6] Mullens, 153, 157; Wolff, 356; Conacher, 223 など．

λαβόντα νύμφην· μὴ γὰρ οὖν ζώιην ἔτι,[7]
εἰ μὴ ᾽π᾽ ἐκείνηι φάσγανον σπάσω μέλαν.
ἢν δ᾽ οὖν τὸν Ἑλένης μὴ κατάσχωμεν φόνον,
πρήσαντες οἴκους τούσδε κατθανούμεθα. 1150
ἑνὸς γὰρ οὐ σφαλέντες ἕξομεν κλέος,
καλῶς θανόντες ἢ καλῶς σεσωμένοι.

もし彼女に向けて黒い剣を抜かないならば，生きていたくはない．もし Helene の殺害をものにできないならば，私たちはこの館を焼いて死んでしまおう．というのも，一つのことは失敗せずに名声を手にすることができるだろうから，カロスに死ぬかカロスに助かるかして．

まず，1147-48 は<叶わなければ生きていたくはない>と言っているわけだが，それは古代ギリシアの倫理感覚においてどれだけ受容れられることだったろうか．満足できない状況の中で死を好ましいと語る例は，Homer においていくらかあるが[8]，それは基本的に絶望の深さを表す手段であった．死を望ましく思っても男子が自ら命を絶とうとするケースは殆どなく[9]，あっても咎められるべきものとされている[10]．そういう死を立派と見做すことは，まず普通にはありえなかっただろう．しかし，死刑を宣告された親友と運命を共にすることをすでに決意した Pylades においては，少し状況が異なる．自害せねばならないという事情のなかでは，彼の言っていることは「死ぬ前にしたいと思うことは，もう他にはない」ということに等しい．それならば，この言はマイナスの響きなしに，ただ Helene 誅殺への一途さを表すものだということができる．

次に問題となるのは，そのような自害を 1152 でカロスなる死だと申立てていることである．１節でも述べたように，戦中死に相当するわけではない死をカロスと形容することにどれだけの説得力があるかは疑問である[11]．しかし，そんな死をカロス死と認定しうるかどうか詮索することは，ここでは重要ではない．実は，死のカロスさという話題は 781-83 でも触れられていた．そこでは Pylades が Orestes に，自分を裁く民会に出頭し意見を戦わせた上で死刑を宣告される場合の方が，何もしないでそうなる場合よ

---

[7] 使用する *Orestes* の基本テクストは Diggle の校訂によるものである．

[8] Odysseus: *Od.*1.58, 10.51; Achilleus: *Il.*18.98; Andromache: *Il.*6.410-11 など．

[9] S.*Aj.*における Aias の自殺は，状況が満足できないゆえの行為というより，恥をさらすことに対する拒否の表明である．

[10] *Il.*18.32-34.

[11] West ad 1152 は，この申立ての意味をとらえかねている：‘only it is not obvious what is so glorious about it.’

りも，よりカロスに(κάλλιον: 比較級副詞形)に死ねるだろうというのである．

{Ορ.} ἀλλὰ δῆτ᾽ ἔλθω; {Πυ.} θανὼν γοῦν ὧδε κάλλιον θανῆι. 781
{Ορ.} εὖ λέγεις· φεύγω τὸ δειλὸν τῆιδε. {Πυ.} μᾶλλον ἢ μένων. 783
{Ορ.} καὶ τὸ πρᾶγμά γ᾽ ἔνδικόν μοι. {Πυ.} τοῦ δοκεῖν ἔχου μόνον. 782

Or. では行くことにしようか.
Py. それがいい，そうして死ぬのならば，よりカロスに死ぬことになるだろう，
Or. 君はよいことを言う．その方法で卑怯さを避けよう．
Py. ここにじっとしているよりもだ.
Or. そして私のこの行為は正当なのだ
Py. そのように映るようにただ努めよ.

ここで話題になっているのは刑死であり，しかも民会という言葉の戦いののちに場を改めて行なわれる死であって，戦中死とは大きくかけ離れたものである．しかしそれと似通ったところもある．民会という論戦の場で命を賭けて戦った結果として発生する死だという点である．ならば，ここで κάλλιον によって表されているのは，カロス死でなくとも，それに近い，似ている，ということだと判断される．そのことが示唆するのは，カロス死の条件を完全には満たさない死にも，カロス死らしさを認めることができるということである．そのような経緯があるならば，ある死を無理してカロスだと申立てることは，それがカロス死に何らかの点で似ているという主張なのだと解しても，なんら不自然ではないだろう．

そうだとすると，ここで我々が考えるべきことは，1147-52 で想定されている死はどういう理屈でカロス死に似ていると主張されているのかということだろう．Pylades は，Helene 誅殺が叶わなければ死ぬと言っているのであるから，カロス死と似ているところがあるとすればそれは何よりも，＜命を賭けた結果として死ぬ＞ということであろう[12]．Pylades は，1152 のカロス死申立てによって，誅殺に命を賭けると宣言しているのだと解することができる[13]．

命を賭けるといっても，いずれにしても間もなく死なねばならない人物が何かに命を賭ける，という場合は，その賭けの価値も減じるだろう．しかるに，Pylades は，すで

[12] このほか，甚だ屈折した見方ではあるが，放火した館の中でわが身を焼くということも，華々しい復讐行為の只中で死ぬということとして，カロス死らしさの一つと言えるかもしれない．
[13] 彼の提案を詭弁・唆しととる向きもあるが，以上のことを踏まえると，Pylades は詭弁を弄して Orestes を Hermione 殺しへと唆していると断じるのは必ずしも当たっていない．むしろ誅殺に向けての自身の真摯な意欲を語っているのだとしてもおかしくない．

に親友とともに死ぬ決意をしているとはいえ，もともとは死なずともよい立場にある．そのことを考え合わせると，彼が命を賭けるということの意味は小さくないと言える．

また，このパッセジには，Pylades の究極の目標が明確に語られているということも指摘しておきたい．すなわち，1150-51 で彼は，カロスに死ぬかカロスに助かるかして名声(κλέος)を手に入れることができるということが，命もかけて Helene 誅殺を試みる理由だとしているのである．彼はここで，生きるにしても死ぬにしてもカロスに振舞うこと，そしてそこから得られる名声が，何よりも目指すべきものだと言っているわけである．

以上のように Pylades は，Helene 誅殺は命を賭けるに値するが，それ以外の方法で Menelaos に復讐することはまずいと考えた．彼の究極の目標は，カロスなる振舞いと名声(κλέος)であった．

しかし彼の果たした次の働きも見逃してはならない．すなわち，彼は，誅殺を試みた上で自害することをカロスなることだと指摘することによって，Orestes らに宣告された死をとびきりの名誉あるものにかえる論理をあみ出した．また彼は，Helene を誅殺するという形にすることによって，Menelaos への復讐が(少なくとも一応)大義のもとに遂行できるようにしたし，無制約な復讐は問題を孕むものであるとの示唆もした．

３．復讐決意するまでの Orestes

Orestes は Menelaos に復讐するという提案を聞かされて賛同するが，それまでと明らかに違う態度を見せ始めるのは，Elektra から Hermione を人質にするというアイデア(1189)を聞かされてからのことである．ここで明らかにしたいのは，その前段階すなわち，Orestes が Pylades の説明を聞き終えて復讐を決意する(1176)までに，名誉や生死や復讐についてどういう態度を示していたかということである．

当初彼は民会から死刑を宣告される恐怖に怯えていたが，やってきた Pylades に励まされ，民会で命を賭けた論戦を試みることを決意した．それは，予期される刑死を少しでもカロス死に近いものにするためであった(781)．論戦の甲斐なく死刑を宣告されると，彼は投石刑を免除してもらう代りに自刃することを約束し，「εὐγένεια(生まれのよさ)の証」として，肝臓に剣を勢いよく突刺して(παίσας πρὸς ἧπαρ φασγάνωι)死のうと用意を整える(1062-63)．Pylades に再会して以来，自分の死に様はよいものにしたい，少なくとも，生まれに恥じないものにしたいという意思を彼自身で明確に示していたと言える．以上が，復讐の提案を聞かされるまでに Orestes が見せていた態度である．それが彼の関心のほぼすべてだったのであり，そのためには痛みや恐れは無に等しいものであったとも言えよう．

しかし，Menelaos に復讐するというアイデアが Pylades から提案されると，彼は自刃しようとしていたのを中断する(1098-1102)．そして，Helene を殺すという具体化さ

れたアイデアを聞くと,「それを果たしたならば二度死ぬことも厭わない」(1116)と言う．これは，Helene を殺して復讐することが，いわば命よりも，すなわち何よりも大切だという意思表明である．

これに対して Pylades は，公敵である Helene を殺すのでなければみだりに復讐はできないことを示して，舞上がった彼を牽制する．Helene 以外の女を殺すことは自身の名誉を汚すことだとまで言う(1133)．その代り，この誅殺を試みるならば失敗して死ぬにせよ成功して助かるにせよ名声を博することになると言う(1151-52)．Orestes はこれを受けて Pylades を絶賛し(1155-62),「自由人らしく死ぬ」こととともに Menelaos に復讐することを宣言する(1163-76).

この経過の中で特に注目したいのは, Orestes が 1062-63 で示した＜εὐγένεια を証するという意思＞と，彼が 1163-76 で語った＜自由人らしい死と復讐の意思＞という２点である．

まず，剣を自身の肝臓に突刺すことによって εὐγένεια を証することができるというのはどういうことだろうか.

> κἀγὼ μὲν εὐγένειαν ἀποδείξω πόλει, 1062
> παίσας πρὸς ἧπαρ φασγάνωι·
>
> そして私も，εὐγένεια をポリスに示してやろう，肝臓を剣で突刺して.

ここにあるのは，臆せず勇ましく死を自らに課すという動作である．しかし，むやみに勇ましくなされる自害がみな εὐγένεια の証となるわけはない．この動作がこのコンテクストの中で何を表すかが重要である．どんな態度が表されているかを掴むには，Orestes が Elektra に自刃の覚悟を促すために語った 1022 からの一連の語りかけを振り返るのがよいであろう．なぜなら，上の２行はそのまとめとして語られた言葉だからである．彼はその最初から「女々しい嘆きはやめて，決定されたことを静かに受容れないか」(1022-23)と言い，姉とのやり取りにおいてもその旨のことを繰返す．彼が，同じ生れの姉と共に守らねばならないと考えていたのは，受容れるべき死ならば，嫌がらずに受容れるという態度なのであった．「輪縄を吊下げるか手ずから刃を研がねばならない」とも言う(1035-36). つまり，ここでの肝臓の一突きは，＜一旦死ぬべきことになったら，挙動の上でも心情の上でも死を潔く受容れる＞ということなのである．それが εὐγένεια を証するというのは，そのように振舞うことが εὐγενής たる者に相応しい振舞いであり[14]，それができることが εὐγενής の条件だということである[15].

---

[14] Reinhardt, 39 も，運命を英雄的に受けとめることが良き生まれの者のとるべき行動だと述べてい

次に，Pylades の提案をすべて聞いたうえで Orestes が表明する結論を見てみよう．

ἐγὼ δὲ πάντως ἐκπνέων ψυχὴν ἐμὴν
δράσας τι χρήιζω τοὺς ἐμοὺς ἐχθροὺς θανεῖν,
ἵν᾽ ἀνταναλώσω μὲν οἵ με προύδοσαν, 1165
στένωσι δ᾽ οἵπερ κἄμ᾽ ἔθηκαν ἄθλιον.
Ἀγαμέμνονός τοι παῖς πέφυχ᾽, ὃς Ἑλλάδος
ἦρξ᾽ ἀξιωθείς, οὐ τύραννος, ἀλλ᾽ ὅμως
ῥώμην θεοῦ τιν᾽ ἔσχ᾽· ὃν οὐ καταισχυνῶ
δοῦλον παρασχὼν θάνατον, ἀλλ᾽ ἐλευθέρως 1170
ψυχὴν ἀφήσω, Μενέλεων δὲ τείσομαι.
ἑνὸς γὰρ εἰ λαβοίμεθ᾽, εὐτυχοῖμεν ἄν·
κεῖ ποθεν ἄελπτος παραπέσοι σωτηρία
κτανοῦσι μὴ θανοῦσιν, εὔχομαι τάδε.

何としても私は，最後の息を吐きながら私の敵たちに何がしかのことを果たした上で死にたいものだ．私を裏切った者たちを滅ぼし，私を惨めにした者たちを嘆かせるために．私は，敬われてヘラスを治め，ただの王ではなく神の力ともいうべきものを持っていたアガメムノンの子として生まれた．私は奴隷的な死を甘受してその方を辱めるようなことはせずに，自由人らしく魂を放つ．それに，Menelaos に復讐をする．というのも，もし一つを手に入れたら，私たちは幸運というべきだろうから．またもし予想外にも，殺しを果たした者たちに，自らは死なずともよいという救いが出来するならば，それは願うべきことだ．

これは，Pylades を 8 行にわたって絶賛した直後に Orestes の語る言葉だが，彼の考えは Pylades の考えとどれだけ一致しているのか，という疑問を呼起こす．というのは，彼自身の口からは，Pylades が表明していたような＜Helene を誅殺することに命をかける＞という特定の情熱が聞こえてこないからである．彼は復讐への情熱において，殺すのは Helene でなくてはならないという自制を Pylades のように持っているのだろうか．注目されるのは，自由人らしく死ぬという意思と復讐意思とが並行していることを示す

る．しかしそこでは，「英雄的に受けとめる」がどういうことなのかは明確化されていない．εὐγενής に相応しい振舞とはどういうものかを説明することは，確かに困難である．εὐγενής に期待される行動規範を踏みはずさないことだと理解するのが実際的であろう．

15 ただしこれは，εὐγενής のすべきことはそれだけだ，ということではない．このことは重要である．

1169-71 である．彼において復讐意思の比重はどれほどのものか．復讐意思の歯止めになるようなものはここに認められるだろうか．明快には分らないのは確かだが，テクストから判断できることは何か，ということを探ってみよう．

γάρ で導かれている 1172 は，1169-71 のように決意した理由を語るものだと考えられるが，1172 まで来ても，二つの意思の比重は明らかにならない．それどころか，1172 がどういうことを言おうとしているのかもよく分らない．しかし 1173-74 を見ると，ある理解へと導かれるように思われる．ただし，1172 の末尾の句読点について，1895 年の Wedd や 1909 年の Murray のテクストが載せている伝統的な読み(末尾をコンマとする)ではどうしても問題があるようで[16], 1896 年の England が提唱して以来 Gow(1916), Jackson(1955), Willink(1985)[17]によって支持されてきたように(末尾をフルストップないしコロンとする)読むことが必要となる．上に掲げた Diggle のテクストもその読みに拠っている．

ともかくも，1172 は「もし一つを手に入れることができたら，我々は幸運だろう」というものであり，「一つを手に入れる」とは何のことなのか分りにくい．1172 までしか見なければ，England のように，自由に死ぬことと復讐することのどちらかではないか，と迷うかもしれない．では Orestes はここで，復讐さえ叶えばそれでも結構だと言っているのだろうか．しかし，続く 1173-74 には＜両方を手に入れた場合＞のことが述べられている，ということに気付くべきである．つまり，「殺しを果たした者たちに，自らは死なずともよいという救いが予想外にも出来するならば(i.e.殺しても自分たちは死ななくともよいという事態になるならば)，それは願うべきことだ」というのであるが，それは＜死ななくともよい＞と＜復讐を果たす＞ということの両方が叶うことを言っているのである．そのようにして見ると，1172 で言っていたのは，＜死ななくともよい＞は叶わないが＜復讐を果たす＞だけがかなうという事態を想定して，それを幸運だといっていたのだと解される．

それならば，それは具体的には，＜自由人らしくない死に方をするが復讐だけは叶う＞という事態ではないだろう．というのも，それが「幸運」(1172)と評価されるとは考えがたいからである[18]．＜一つが叶う＞とは，＜死は避けられないが，自由人らしい死と復讐が一セットとして叶う＞という事態のことだということが分る[19]．ここで注目すべきなのは，Orestes は，復讐さえ叶えば自由人らしい死が叶わなくとも結構だと言っているのではないということだ. そして, 自由人らしくない死に方をするという選択肢は,

---

[16] Willink, ad 1172-76 を見よ．England, 354; Gow, 81-82; Jackson, 182-83 も見よ.

[17] Willink が text として載せているのは Murray のものだが，Commentary においてはこちらを支持していることが分る.

[18] Wedd, ad 1172-4; Gow, 81-82.

[19] 以上の解は Willink, ad 1172-76 が短く示唆していることの応用である.

彼の考えにはない. 彼にとって自由人らしい死とは, 原則的に外せないことなのである.

このことは，次の事実からも裏付けられる．すなわち，議論の流れを見ると，復讐は 1163-66 で＜欲求＞として語られていたに過ぎないが(χρήιζω)，すぐそのあと，自分が偉大な Agamemnon 王の息子だという不動の＜事実＞が 3 行にわたって語られ，1169-71 ではそこからの当然な要請として，自分は生れに恥じない死に方をせねばならないと語られている．しかも，守らねばならない方のこと(自由人らしく死ぬこと)は自分の意思しだいでほぼ確実に遂げられるはずのことであり，欲求の方(Helene を殺害すること)は自分の努力だけでは確実を期せない案件である．それならば，1172 で「叶えば幸運だ」とされているのは，叶わないかもしれないことのはずであり，その不確定要素とは復讐の成否である.

もちろん，復讐が彼にとって痛切な欲求でないことはないだろう．しかしこの時点でどれだけ切実なのかは分らない．確かなこととして言えるのは，Orestes は，Menelaos への復讐を叶えられないかもしれないことと考えているのに対し，自由人らしい死は原則として外せぬことと考えているということだ.

では，この＜自由人らしく死ぬ(ἐλευθέρως ψυχὴν ἀφήσω)＞とはどういうことだろうか[20]．自由人に相応しい死に方をすることだということは自明であるが，その意味するところは曖昧だと言わざるを得ない. 1062-63に語られたような死に方ももちろんその中に含まれるだろうが，それですべてではない．自由人らしい死とは，「したいこと(復讐)ができない状態ででではなく(不自由な思いをすることなしに)死ぬ」ということも含意しうるかもしれない．しかし好き放題のことをして死ぬということならば，ἐλευθέρωςの範疇を超えてしまう[21]．普通には，「他人の統制の下でなく死ぬ」あるいは「自身の統制の下で死ぬ」ということを意味すると解される[22]．我々としては，この意味での発言がこの文脈にうまく収まるかということを考えてみるべきだろう.

Orestesは，民会から自刃の許しを得た時，既に自身の統制の下で死ぬことが可能になっていたのであったから，ここでそのように死ぬと宣言しても前からの決意を繰返し言

---

[20] Orestes が 1171 で用いている＜命を放つ(ψυχὴν ἀφήσω)＞という言い回しは，選択的行動としての死(必死行為の積極的受け入れにせよ自害にせよ)をも表しうるし，死全般をも表しうるものである(see LSJ, s.v. ἀφίημι, II.2)．ここでは選択的行動としての死を表していると思われる.

[21] 復讐を果たさぬまま死ぬということが，自由人または良き生まれの者に相応しくないということはあるかもしれない．たとえば，Eucken, 165 は，復讐行為のために死ぬことによって自由人らしい死が達成されると考えている．しかし，上で論じたように 1170-72 の Orestes は，自由人らしい死に復讐達成が加わったら幸運なのだと言っている．つまり彼は，復讐が達成せずとも，自由人らしい死は達成できるつもりなのである.

[22] 自然死なども自由人らしい死に含まれるだろうが，それは「他人の統制の下でなく」という意味においてのことである．然るに，*Herakl.* 559 の ἐλευθέρως で修飾された死(Makaria の)や *Hec.* 550 の ἐλευθέρα(自由な女として)で修飾された死(Polyxene の)は，その意味を超えて，「自身の統制の下で」という意味で使われているというべきだろう.

っただけのように見えるかもしれない．しかし，彼らは新たにHelene殺しを企てるところなので，状況は大きく変わろうとしている，ということを忘れてはならない．その企てに伴って，彼女の護衛との間に戦闘が生じ彼が捕獲されたり戦死したりする可能性も新たに考えられるのである．だから，ここで彼が，捕獲されて殺されそうになった場合には先んじて自らの手で死ぬという決意を語るということは，ごく自然に考えられることである．そしてそういう趣旨ならば，もしHelene殺しに失敗したら自害すると言っていたPyladesの言(1147-50)によく対応する発言だと言えるし，彼がこの演説の最初にPyladesへの賛同を吐露していたこととも調和することになる[23]．それならば，＜自由人らしく死ぬ＞という言葉は「捕まることなく自分の統制の下で死ぬ」という意味で語られていると解するのが妥当であると考えられる．Orestesは復讐をうまく果たせない場合も見込んで1169-71を語っているのである．またそれだからこそ，1171で復讐成就への意思もあえて言添えているのだと解される．

分析が長くなったが，OrestesがPyladesの提案に応えて語った結論を簡潔にまとめると次のようになる．私はいま命をかけて，私を苦しめた者に復讐したい(1163-66)；ことがうまく運ぶとしても運ばなかったとしても，私は捕えられることなく自分の手で果てる(1166-71)；もしその過程で復讐が成功するならば，死ぬのであっても幸運というものだ(1172)；さらにもし，死なずに済むとしたら，もっけの幸いである(1173-76).

復讐を決意するまでにOrestesのとっていた態度全体をまとめると，次のようになる．彼は基本的にεὐγενήςに相応しい振舞いを目指していた．死なねばならない以上，死に方についても＜εὐγένειαの証たる潔い死＞(死ぬべき場合には潔く果てること)を志していた．しかし復讐のアイデアを聞かされると，彼が目指すものは＜自由人らしい死＞(自分の手で果てること)へと広がり，またMenelaosへの復讐への意思も加わった．ただし，その復讐はまだ運任せのこととして考えており，自由人らしい死と同じほどには必須のものと思っている形跡は見当たらない．Pyladesが述べていたように，Helene殺しが叶わなければ彼も潔く自害するつもりでいるのかどうか，またOrestes自身が1062-63で考えていたように，復讐などできずとも，民会との約束を守っていわばタダで潔く自害するつもりのままなのかどうか，ということまでは，1176の時点ではわからない．とはいえ，この時点では，復讐は一応大義名分のあるHelene殺しのイメージでしかとらえられておらず，彼の復讐意思もそれを超えるものではなかったと考えるべきであろう．

４．屋上の Orestes

では，屋上に現れた Orestes はどのように変様しているだろうか．まず，復讐決意後

[23] 1163-64 で Orestes が，最後の息を吐出しながら敵に復讐を果たしたいと言っていたことは(復讐行為と死の同時性)，1152 で Pylades が，死ぬならカロスなる死を遂げるという意思を語っていたこととよく重なり合う．このことも，Orestes のこの演説の一貫性を高めるものである．

に起こったことを概観しよう．まもなく Elektra が二人に口を挟んで，Helene を殺しても Menelaos に制裁されずに助かることができるよう，Hermione を捕獲して人質にすることを提案すると，Orestes はこれを容れて動き出す．館に入って Helene を捕まえ，あとは喉に剣を突刺すだけというところまで至るが(1472)，そこへ Hermione が現れると，彼は彼女を捕えるために Helene から離れ，その隙に Helene は姿を消してしまう．Helene の召使のプリュギア人を追って館から出て来た彼は，アルゴス市民の蜂起は怖いが Menelaos と剣を交わすことは恐れないと言いながらも(1531)，館に戻り門をかけてしまう．

騒ぎを聞いて Menelaos がやって来ると，Orestes は Hermione を連れて屋上に現れ，締出された Menelaos に向けて無条件的な言い回しで，彼女を殺すと３回も繰返し(1578, -86, -96)，逃亡の提案も拒む(1593-94)．無罪放免するよう市民を説得してくれなければ Hermione を殺す，とも彼に言うが(1611-12)，相手がぐずぐずしていると，館を放火するよう姉と Pylades に命じて，もろともに焼かれることが確定する．ただそれは，突如現れた Apollon 神によって制止される．

ここで大変重要なのは，Orestes が実行すると言い張っている Hermione 殺しは途方もない行為であるということだ．もし少しでも彼に言い分があるとしたら，復讐ないし貸し[24]の取立てということだろうが，その妥当性は怪しい．もともと，Helene 殺しを立案した時に Orestes と Pylades がしようとしていたのは，民会において救援してくれなかった Menelaos への復讐である(1099. cf.1171)．しかし Hermione を殺すことは，Menelaos への復讐としては過大であるように思われる．*lex talionis* の場合ならば，復讐として何がどこまで妥当かは判定しやすいが，Orestes のしようとしていることは彼の受けたことと同じではない．Menelaos の非は，Orestes らを助けるために何もしなかったということであるから，誰かの命を奪うことが Menelaos への復讐として Orestes に許されるという説明はつきそうもない[25]．もちろん，トロイア戦争の際に Menelaos 家が Agamemnon 家に Iphigeneia の命という借りを負った分だけ(642-59)，Agamemnon 家の者が Menelaos 家に返済を請求する権利や Menelaos の裏切を責める権利はあるだろう．しかし，貸しがあるからといって強奪してよいというものではない．Iphigeneia の死が神託により要求されたものであったし，またそれはギリシアの名誉を左右するものであったのに対し，Orestes は自分の恣意によって相手の娘の命を所望しているに過ぎない．Hermione が Orestes によって殺されることの必要性は，Iphigeneia

---

[24] トロイア戦争のために Agamemnon が供した Iphigeneia の命のこと．

[25] その意味では，Orestes が Hermione を殺そうとするのは，Achilleus の亡霊が自身の取り分として Polyxena の命を所望したことに似ている(e.g. E. *Hec.*40-41)．しかし，トロイア戦争の功労者で，しかももはや生身の人間ではないアキレウスと同じ資格を Orestes が有していないことは明らかである．

が生贄として死なねばならなかったという必要性とは比較にならないことである．

また，この殺しは恥ずべき行為でもある．Pylades が 1132-33 で次のように言っている．

εἰ μὲν γὰρ ἐς γυναῖκα σωφρονεστέραν　　1132
ξίφος μεθεῖμεν, δυσκλεὴς ἂν ἦν φόνος·

もしもっと正気な女に刀を突刺すならば，それは名誉が傷つく殺害となろう．

直後に続く Helene への非難の言葉も踏まえると，彼の言い分は，最大の悪女である Helene ならもともと殺しても問題ないが，それ以外の女を殺すことは妥当でないということである．Hermione 殺しはまさにそれに当てはまるだろう．彼はここで，名誉／恥の観点から話している，ということが特徴である．そのような殺しが δυσκλεής(名誉を損なう)とされているのは，何よりも＜無力な第三者や無防備な相手に危害を加えて復讐する＞ことは女のすることであり[26]，男のなすべきことではないという通念からだと考えられる[27]．害すべき当人でなく第三者を攻撃することは，1531f のようなことを言う者のもとではなおさら恥ずべきことと映る．

ここで確かに言える一つのことは，Hermione 殺しは Helene 殺しよりも妥当性がずっと小さいということだ[28]．そもそも Hermione 殺しは，Menelaos が要求を拒めないようにするために，Elektra が最大限に受容れ難い alternative として案出した事案なのであった．だから，それが法外なものであるのは当然のことなのである．

そうであれば，屋上の Orestes は，本気で Hermione を殺すつもりなのかどうかという疑問もわいてくる．彼は，相手がこちらの要求に応じるよう，その気もないのに無理して途方もないことをすると言っているのではないか，という可能性も考えてみなくてはならない．実際，彼が Hermione を殺すと言っているのは助かるための脅しに過ぎない，と主張する研究者たちもいる[29]．しかし，実のところ，彼はあまり熱心に助かりを求めているようには見えない．というのは，彼が自分たちの無罪放免をアルゴス市民に

---

[26] 例えば，夫に復讐するために子供を殺す Medeia や Prokne，息子を殺された復讐として Polymestor の子供たちを殺す Hekabe が挙げられるが，男が第三者への危害を以って相手への復讐とするというケースは，神話の中では殆ど見当たらない．Atreus は，Tyestes に復讐するとき相手の子供たちを殺すが，復讐の真骨頂は相手にその子供の肉を喰わせるというところにある．Aigisthos は，父 Tyestes が Atreus から受けた仕打ちへの仕返しとして相手の息子たる Agamemnon を殺すが，それは，Atreus が既に死んでいて直接相手を害せないという状況でのことである．

[27] Zeitlin, 326-27.

[28] もちろん，ヘレネを殺すということにもどれだけの妥当性があるのかは，Pylades の主張にもかかわらず，自明ではない．しかしそれはこの際問題ではない．

[29] Steidle, 115; Erbse, 449; West, 34.

説得するよう Menelaos に要求するのは(1610-11)，屋上から Menelaos とやり取りをはじめて(1567)からしばらく経ってからのことであり，しかもそれを二言(２行)で切上げてしまうからだ．それならば，彼は，もし Menelaos が市民を説伏せたなら Hermione 殺しの取りやめも考えないではないが，大してそれに期待を寄せてはいないのであって[30]，それよりもむしろ，亡命も拒んでいる彼(1594)の基本的な意向は，Hermione を殺して自害するということだ，と解するのが妥当であろう．

彼が Hermione を刺殺するにせよしないにせよ，彼が彼女ともろともに死のうとしているということは，彼の次の振舞いによっても裏付けられる．すなわち，Menelaos が 1617(ἔχεις με)で負けを認めても，Orestes はそれに皮肉な言葉でしか応ずることなく，Elektra と Pylades の双方に命令を下して放火に突進むのである[31]．

もちろん，Apollon が差止めなかったとしても彼が土壇場で Hermione を放棄するという選択肢がなかったとはいえない．しかし重要なのは，彼が Hermione を殺そうとする姿を見せているという事実，そして彼が本当に彼女を殺すという想定が他の人物たちを実際に怖れさせ，また彼の言っていることの途方もなさが我々を唖然とさせるという事実である．これは劇なのであり，どういう姿を演じているかが意味を持つのである．その姿がどういう意味を持つかを考えることが必要である．

では，Orestes が Hermione を殺すとはどういうことなのかをもっと掘下げて考えてみよう．まず言えることは，なぜ Hermione を殺すのかを Orestes 自身はどこにも語っていないということだ．この殺しは，Menelaos への復讐として案出された Helene 殺しの代りに浮上してきた事案だからか，これを復讐としてとらえるのが一般的であった[32]．確かに，それは Menelaos を苦しめることであるから，彼への復讐に数えることはもちろんできる．また，1616 では Orestes 自身も，Menelaos が今苦しんでいるのは彼が役に立ってくれなかったからだと言っている．しかし，これは Menelaos のしたこと自体(民

---

[30] もし Menelaos が市民への説得を試みたとしても，Orestes らが Helene 誅殺を成功させて市民の支持を得るに至っているわけではないから，Elektra が最初に目論んでいたほどの確実な成果は望めなくなっている．―という事情も，そう解することの妥当性を裏付ける．

[31] それを制止するのは，その直後に登場する Apollon である．このことが示唆するのは，Menelaos には Orestes を制止できる力がなかったということである．

[32] 誰に向けての復讐か，何事に対する復讐か，妥当な復讐か否かについての考えはまちまちだが，復讐ということを明記する研究者には次の人たちがいる．Mullens, 156: コントロールが効かなくなった，血で血をという復讐；Falkner, 296: 大人たちの流儀を真似た復讐；Eucken, 167: Menelaos の侮辱を目指した復讐；Komorowska, 46, 52: 社会から受けた侮辱にも触発された *lex talionis*. Menelaos に対する貸しの不正な取立てとみる Wolff, 352 もここに連なる．復讐とも何とも名づけない人は多いが，復讐と見ることにあえて意見する人は少ない．Hermione 殺しが過剰な復讐だと考えても，復讐にとどまるものではないと主張する人は稀である．Porter は，公認された復讐だとみなしつつも(id. 82-84)，腐敗した社会に対する反乱・抗議(id. 53, 88f., 97)でもあるという特殊な例である．しかし私は，Orestes が社会に対して批判的メッセージを呈しているのだと見ることには反対である(下註 34 を見よ)．

会における援護の怠り)に対する復讐としては法外に大きい企てなのである．それだけのものではないということはないだろうか．

では，自分が死刑にされたことに対する復讐として理解すればよいだろうか．Hermione 殺しが死刑にされたことへの憾みに発する行動であるというのは尤もである．しかしそれが復讐だけで説明できるものであるかは疑わしい．というのも，復讐であるならば，それが誰に向けての復讐なのかが問われるからだ．もちろん，死刑判決は Menelaos が援護に立たず Tyndareos 一味が民会を扇動した結果であるから，彼には，死刑にされたことで Menelaos を恨む気持ちや，Tyndareos 一味と民会を恨む気持ちがあっても不思議ではない．しかし，第一に，死刑にされた憾みを Menelaos にぶつけるということは，Menelaos の所為ではないことの報いをも Menelaos に向けるということであって，復讐の枠内にきれいに収まるものではない．また第二に，Tyndareos 一味や民会にとっては，Hermione の死が復讐としてさして有効な痛手になるようには見えない[33]．それは Tyndareos 一味や民会への復讐にはならないのである．それならば，Hermione 殺しは復讐(受けた痛みを相手に返報すること)というだけのものではないのではないか．少なくとも Pylades の考えにおいては，Helene 殺しは Menelaos への復讐を超えて Helene その人への誅罰でもあったが，ちょうどそのように，Hermione 殺しも Menelaos への復讐よりもっと大きな意味を持つものであるという可能性も考えてみるべきなのである．

そこで思い当たるのは，1098 から始まる新しい展開の最初に発せられていた，「我々は死ぬのだから」(ἐπεὶ δὲ κατθανούμεθ᾽ 1098)という Pylades の言葉である．彼らは，Menelaos の＜裏切り＞に怒っていることは確かだが，最終的に死ななくてはならなくなったという事情があるからこそ，Helene や Hermione をも死なせようとしているである．たしかに，かの箇所ではそれは Menelaos を苦しめる理由として語られたものであったが，Orestes を法外な人質殺害へと動機付けるものとしても，これ以上理解しやすいものはないだろう．それならば，Hermione 殺しは，＜Menelaos のしたこと＞というよりも＜Menelaos のしたことから出来した事態＞全体の代償を，Menelaos が苦しむような形で一括して取返すということに他ならない[34]．これは，本人がどう認識しているかということとは別次元の話である[35]．Hermione 殺しは，Menelaos への復讐をも

---

[33] 妥協しない Menelaos や民会に Hermione の死の責任を転嫁して彼らを困らせるということは，しようと思えばできるであろう．しかしそのような画策がここでなされているということを示唆するものはどこにも見当たらない．

[34] 民会の決議に対する向けようのない不満を，Hermione 殺しという形で晴らすのだと言ってもいいかもしれない．それは，誰に対する復讐というのも当たらないし，Porter, 88 の言うような社会への protest というのも正しくない．

[35] 心情のレベルでは彼らは，どうせ死ぬことになっているのだから，何も恐れたり遠慮することもなく，どうしてもやりたいことをしてしまおうという気持ちであるかもしれない．しかしここで重

兼ねているが[36]，本質的意味においては，自分が死なねばならなくなったということ全体の強引な埋合せなのである．

Orestes は，逃げずに館を焼くと言い(1594)，さらに，館が焼け落ちるのは Hermione を刺殺した上でのことになると言っていた(1595-96)．これが意味するのは，彼は—自刃によるか否かは定かでないとしても—館の中で自ら死ぬつもりであるが，ただしそれを Hermione 殺害なしにはしない，ということである．つまり，彼の自害と Hermione 殺しは抱合せになっている．確かに彼は，自害しないとは言っていない．しかし，自らの死の埋合せを取ることなしの自害はありえない，というのが彼の現在見せている態度だと言える．屋上の Orestes の中にあるのは，＜タダでは死なぬという魂胆＞とでもいうべきものなのである．

以上のことをもとにしてここで考えてみたいのは，Orestes の行きついた人質殺しという行動は，彼が復讐を決意する時まで意図していたこととどのように食い違っているかということである．３つの観点から考える．

まず死に方をめぐってである．彼は今も死ぬつもりを覆していないが，当初彼はどのように死ぬつもりでいたかを思い出してみよう．1170-71 で，彼の目指す死に方は＜自由人らしい死＞と明言された．自ら放火した館と共に果てようとする彼は，確かに，他人の統制のもとで死ぬのではないという限りにおいては，その意思を守っていると言える．しかしそれよりも少し前に，彼は＜εὐγένεια を証する死＞を目指していることも明らかにしていた(1062-63)．それは，先述の通り，仕方のない死ならば潔く受容れるということであった．それは 1170-71 までに取消されたわけでもなかったし，「自由人らしい死」と背反するものでもない．しかるに，いま屋上の Orestes は，死を拒んではいないが，タダでは死なないという頑なな態度を示している．つまり彼は，死を受容れる態度において，εὐγενής としての矜持を捨てたのだと言える．

次は，Orestes が死刑を言渡された時に民会と交わした約束と照し合わせてみよう．彼は民会に対して，自刃するという約束と引換えに，投石刑を免除してもらったのだった(946-48)．たしかに屋上の Orestes は，自刃によるのか否かは語らずとも，自害する意思は翻していない．だから彼はあからさまに約束を破ろうとしているわけではない．しかし彼は，かの約束にかんして二つの意味で違背を犯している．というのはまず，もともと Orestes は無条件で死罪に従わなくてはならなかったのに，民会はいわば特別の

要なのは，彼らが死なねばならなくなったことと引換えに，彼らの企て（最初は Menelaos への復讐ということだが，ヘレネ誅殺，人質殺しへと膨張してゆく）が発案されているという事実である．

[36] Menelaos への復讐は，Hermione 殺しのマイナーな意味とでも言うべきものである．この殺しはまた，Iphigeneia の命という Agamemnon 家から Menelaos 家への貸しの等価な取立てであるとも言える．ただし，命の引渡しと取返しの様態が著しく異なるので，もはや単なる貸しの取立てではない．これらの他にも，Hermione 殺しには，自分の死出の道連れを確保するという意味を見出すこともできる（下註 62 を見よ）．

恩恵として自刃という死に方を許可したのであった．つまり民会は，彼が自刃という方法をとること以外の勝手なことはしないという暗黙の了解のもとにそれを許可したはずであり，Orestes もそのつもりであったはずである．しかし彼はいま，埋合せなしには死なないという態度を貫こうとしている．それは，当然そうすべきとして想定されていたようには約束を履行しないということであり，相手の信頼を裏切ることである．また彼は, 自刃の約束の撤回を求めるのみならず, 自分の無罪放免すなわち死罪の撤回をも，—どれだけ本気かは疑う余地があるとしても—Menelaos を通して民会に強引な仕方で求めている．これは約束を破るどころの話ではなく，約束の解消を相手の弱みにつけこんで無理強いするということである[37]．Orestes はこのように，自分から申し出て応じてもらった約束の信義をいま自分から蔑ろにしているのである．

最後に，行動原則について．彼がいま行なおうとしている埋合せの仕方も，彼が当初考えていた原則に悖っているという疑いがある．というのも，彼は 1060-61 で次のように言っていた．

> ἀλλ᾽ εἶ᾽ ὅπως γενναῖα κἀγαμέμνονος　　1060
> δράσαντε κατθανούμεθ᾽ ἀξιώτατα.

> しかしながら，いざ我々は，生れに相応しきこと，そしてアガメムノンに相応しきことを行ったうえで死のう．

死の前には高貴な生れに相応しい行動をなすべきであると彼は考えていた．彼がその直後に口にする，肝臓を剣で突刺すという死に方(1062-63)もその行動の一つである．しかるに，Hermione を殺すということは，上述したように，復讐としても女の流儀によるものであり，復讐以外として見てもほとんど正当化できるものではない．Pylades によればまさに δυσκλεής な行いなのであった．もしかするとそれは，傲岸さにおいては Agamemnon 王[38]の息子に似つかわしい行為だと言えるかもしれない．しかし，一般的な意味で考えるならやはり，高貴な生まれに相応しい行動とは言えないだろう．

以上のことをまとめると，Hermione を殺すと言張ることは，名誉や信義や道義[39]を

---

[37] もちろん Orestes は，直接民会に働きかけているのではなく，アルゴス人らを説得するように Menelaos に要求しているだけである. しかし Hermione の命を盾にしたその要求は民会にとっても脅威である. 実際 Menelaos は,「βιάζεται πόλιν ζῆν(彼は生きようとしてポリス全体を強いている)」(1623-24)という言葉を用いて，これをポリス全体に対する暴力(βία)としてとらえている.

[38] Chryseis を奪われた腹いせに Achilleus から Briseis を横取りした者としての Agamemnon.

[39] 「道義」という言葉を，ここでは「守るべき道」の意で用いる．例えば，裁きに従う，命をかけた勝負の結果を潔く受容れる，道理に合わぬことをしないなどのこと．それは必ずしも正義と同じものではない.

蔑にすることに他ならないのである．Orestes は当初，名誉[40]を命に劣らぬ価値として尊重していたし，信義を大切にしていたし，また道義に背くようなことをするなどは考えてもいなかったが，タダでは死なぬという魂胆にとり憑かれてしまうと，そのような＜よきもの＞への配慮とでもいうべきもの[41]をどこかへやってしまった．屋上において彼が見せている(演じている)のは，そういう態度である[42].

５．意思の不確かさ

前節では，Hermione 殺しの画策の中に Orestes の変様を見出したのであったが，こんどは，なぜそのような変様が起こったのかを考えてみたい．この問題は，彼がなぜ Hermione 殺しを画策するようになったかという問題と重なる．その第一の答えは，彼が死ぬことになったからであるが，さらにその他にはどんな事情があるだろうか.

検討すべきなのは，先行する研究者たちの見解である．Hermione 殺しを画策することを問題行動と見て，その理由を説明しようとした人は少なくないが，大抵は次の三派のどれかにあてはまる[43]．(1)ある人たちは，彼が見境をなくしたのは，受けた酷い仕打ちに反応して(堕落して)のことだと言う[44]．しかし，彼が酷い仕打ちにあったというのはすべて，民会で死刑の判定を受けるまでのことであるのだが，彼は民会から戻ってからも，名誉と信義を重んじて，約束どおり潔く死んで εὐγένεια を証しようという意思を見せていた(1060-64)．そして，上で確かめたように，1169-72 においても復讐意思はまだ絶対優先事項にはなっていなかった．この事実に鑑みると，彼は必ずしも，酷い仕打ちを受けただけで変様してしまったわけではないと言える．(2)また別の人たちは，Orestes は Pylades と Elektra という仲間に唆されたのだと考えている[45]．たしかに，

---

40 名のみの名誉ではなく，称えられるに相応しいものを持ち，そしてしかるべく評価されることという意味での名誉のことである.

41 名誉意識もその重要な要素であるが，＜侮辱を許さぬ心＞は名誉意識の一部ではあっても＜よきもの＞への配慮とは別ものだろう．ここで私が意図する＜よきもの＞とは，人々の声望や尊敬を集め維持する根拠となるような事柄であり，εὐγενής が目指し守るべきもののことである.

42 自分の病は σύνεσις だとした Orestes の 396 の言は，自分の果たした母殺しという所業のおぞましさを認識する(σύνοιδα δείν᾽ εἰργασμένος)に至って苦しんでいることを表すものであった．ここでいう σύνεσις とは，自分の行動に対する客観的認識のことだと解される．この劇は，彼がそのような σύνεσις のない状態に再び陥るさまを描いていると言えるだろう．丹下 244–47 は，死を免れた Orestes が σύνεσις という魂の痛みを苦しみ続けるということを強調するが，この劇自体が克明に描いているのはむしろ，彼がそれを軽率に忘れ去ってしまう様だというのが私の考えである.

43 必ずしもこれら 3 つの立場が排他しあうものではなく，2 つにまたがる立場もある.

44 受けた酷い仕打ちに感化されてのことだと言うのは, Pohlenz, 421: 敵の無分別や下劣さと戦ううちに自らも高貴さを失う；Falkner, 296: Menelaos や Tyndareos など大人たちの流儀をまねた；Porter, 53, 88: 腐敗し悪意に満ちた世界の不正に直面した人物の当然な反応．Wolff, 341, 352: 正義でなく政治力によって裁かれて，常習化された世間の不正と一体化した.

45 仲間に唆されてのことだと言うのは, Mullens, 155-56: Pylades の Helene 殺し提案は誘惑であり，

Menelaos に復讐をするというアイデアを持ち出したのは Pylades であるが，誅殺してよい Helene 以外，女を殺すべきではないという倫理的けじめを教えることも彼は忘れなかった．またたしかに，Hermione を人質に取るというアイデアを持ち出したのは Elektra であるが，彼女は，Hermione の命を脅かすのは Menelaos が Orestes らを殺めようとした場合の最後の手段として提案したに過ぎなかった(1198-99)．Helene を誅殺してその報いとして放免されるという筋道をたてて，Hermione は殺さずにすますというのが彼女の計画であった．しかるに，理由はどうあれ Helene を取逃がし，Hermione を殺さざるを得ないような状況を導いた責任は，ひとえに Orestes 自身にある．このように，彼らは人質殺しよりはずっとまともなことへと導こうとしていたのであって，人質殺しを唆したという責任が彼らにあるとは言えない．(3)その他の人たちの言い分は，Orestes の問題行動は彼の隠されていた本性が表に現れたに過ぎないということだ[46]．しかし，民会での勝負に命を賭ける，死刑を宣告されたら潔く受容れて εὐγένεια の証をする，また死に方は自由人に相応しいものでなくてはならないという最初に彼の見せていた高貴な意思が，彼の本心から出たものでないと言える根拠はない．Menelaos に恨みを感じていても，Pylades の提案を聞かされるまで，彼には復讐するという発想すらなかった．それは彼の偽の姿であって執念深さこそが彼の本性だ，と断ずることはできない．

もちろん，彼らの指摘してきたこれら 3 つの事情が，Orestes の変様に関係ないと考える必要はない．しかしそれ以外にも，より確かな要因が考えられることを見逃すべきではない．というのは，彼の変様は，いま何をすることができるかという状況の変化と大いにかかわっているのである．Orestes が当初，判決により死ぬほかないという状況にあったときには，彼はいたずらに生延びるのではなく潔く死んで「立派さ」を証することを目指していた[47]．すなわち，命に劣らず大切に守らねばならぬものがあるという態度を示していたのである．しかしその後，Hermione を捕獲して人質にすれば死なずに済むということを Elektra から聞かされると，彼の態度に変化が現れる．その時から彼はまず，策略を用いてでも生き延びようという動きに出る．それは少なくとも，自刃という形で死刑を受容れるという民会との約束に背こうとすることである．彼の潔い死への意思，信義への意思が，命への思いの故にまずここでぐらつくのである．さらに，そ

Elektra の人質提案が卑劣さを仕上げする；Parry, 339-43: 理性と人間的思慮を欠いた友らが Orestes の躓きをもたらす；Burkert, 74, 108: Pylades は良心もためらいもない人間で，行動の正当性を気にする Orestes に殺しを薦めて，ヘタイリアの危険性を思わせる存在である．

[46] 隠されていた本性の現れだと言うのは，Arrowsmith, 107-08: 生延びるために Helene 殺しと Hermione 捕獲を決意することで Orestes の犯罪者的本性が明らかになる；Conacher, 217: Orestes の変化は，(堕落というよりも)復讐者という元来の姿が無意識的に露見したプロセスなのかも知れない；Schein, 54: 劇中で各人物がマスクを脱ぎ捨てて下地を見せるに至る．

[47] Willink, lii も，死なねばならぬという状況が，そのような立派さを生み出すのだと指摘している．

ののち，Hermione を捕獲するのと同時に Helene を取逃がしてしまうと，誅殺という功績によって救いを勝取るという可能性は消失し，しかし人質だけは好きなように用いることができるという状況が発生する．彼が途方もない人質殺しをためらいもなく言い張るようになるのは，そうした状況に至ってのことなのである[48]．注目すべきことは，Helene 誅殺に失敗したため，ここで彼が当初と同様に，死なねばならぬという事情に見舞われていることだ．当初彼は，いわばタダで死ぬのであっても名誉を守るということを目指していたが，ここに至っては，名誉を損なうことになろうともタダで死ぬことは拒否する構えである．何が彼の態度の違いをもたらしているのかといえば，人質が彼の手の内にあるので，死ぬにしても埋合せを取ることが可能になったということが決定的だろう．

当初彼がタダで死ぬことを受容れていたということは，彼はそれに大して抵抗を抱いてなかったということだろうか．彼が当初から少なくとも屈辱に対して抵抗を持っていたということは，947 の自刃要求から明らかだ．それは 1170 の自由死欲求にも現れている．しかしそれと＜よきもの＞への意思との間には折合いがついていた．1022-36 を見れば，タダで死ぬことに他ならない＜潔い死＞を積極的に受容れようとしていたということは明らかである．つまり彼は，屈辱的なことは嫌いながらも，＜よきもの＞への意思のもとで譲歩する用意があったのだ．

しかしいま，埋合せが取れるという誘惑的状況になると，彼の中において，埋合せへの欲求が野放しになる一方で，拮抗するべき意思が力及ばないということになっている[49]．彼のなかで屈辱に対する抵抗はたしかに強い．埋合せ欲求に見境なくとり憑かれたのは彼の父も同じであった(*Il.*Bk.1). Orestes が最後に見せた異様な執念は Agamemnon の血筋の現れだと言えなくはない[50]．しかし，埋合せを取る欲求がひとり好き放題に動

---

[48] たしかに，死の埋合せへの熱意は 1098 からあったと言えるが，Helene に逃げられるまでは，それは大義のもとになされるものだったのであり，名誉をはっきりと傷つけるようなものではなかった．じっさい，Helene 誅殺をめざしていた時には，名誉や信義や道義などどうでもいいと割切る必要はなく，＜よきもの＞への意思に反してまでも行動するか否かということは問題にならなかった．しかし，Helene を失ったいま，それは破廉恥な人質殺しによってしかできなくなっている．状況が変わったことによって，ことが問題化してきたのである．Euripides は，ある行動が最初の状況においては達成するのに何の問題もないように見えていたのに，状況を変化させることによりその行動の問題点を抉り出し批判する，という分析手法を *Herakles* においても見せている．これについては Yoshitake (1994), 141-42 を見よ．

[49] このことは次のような事態と似ている．すなわち，金が最小限しかなければ品行方正な暮らしをする人が，金を潤沢に持つと放埒な暮らしをして何らかの問題を引起すという事態，あるいは，本来は誠実な人物なのに目の前におかれたものに誘惑されて不正を犯してしまうというような事態．

[50] 彼は皮肉にも，εὐγένεια の証にならない部分で Agamemnon の血筋を表してしまったと言うべきか．ところで，この埋合せ欲求こそが Orestes を特徴づける本性だとすることはあまり妥当でない．少なくとも Orestes の場合，それは Apollon の指示で霧散する程度の一時的なものにすぎない．彼が最初から恨みに身を焦がしていたわけではなく，Helene 殺しのアイデアを持ちかけられるまで

くようになったのは，名誉や信義や道義への意思が力を失ったということでもある．そのような<よきもの>への意思は，彼の中に確かにあったのだが磐石ではなかったのだ．

ところで，自分で良しとして思い定めたはずの意思が不確かで，何かあると維持できなくなってしまうということは，Orestes においては他にもあった．彼は館の中で Helene を捕まえ，命もかけてその殺害を遂行するという決意を，Pylades と Elektra とともに 1216-45 で堅持していたはずだが，いざ喉元に刀を突刺すだけという段になると，彼はそれを果たさずじまいとなる．使者の言葉によると Orestes は次のように語った．

ὤμοις ἀριστεροῖσιν ἀνακλάσας δέραν, 1471
παίειν λαιμῶν ἔμελλεν εἴσω μέλαν ξίφος.

(彼の)左肩のところで(Helene の)首を後ろに倒したあと，黒い剣を喉の中へと撃ち込もうとしていた．

まもなく館内に入ってきた Hermione に向って Pylades と二人で駆寄る(1492: δραμόντε)までのあいだ，救援に駆けつけた館内のプリュギア人奴隷たちに Pylades が「アイアスの如く」反撃したと語られているが，Orestes 自身が何をしたかは皆目示されていない[51]．もし彼が，掩護されているのに Helene 殺しを果たさず，やがて Helene を手放して Hermione の捕獲に向うだけだったとすれば，彼は Helene 殺しをためらっていたと解するほかない．あるいは，奴隷たちへの反撃を Pylades に任してはおけず，Orestes 自身も Helene を殺す手を止めて奴隷たちと戦ったのだとすれば，彼はためらっていたのではないかもしれないが，その場合にもやはり，彼の Helene 殺しへの決意は鈍っていたと言わざるをえない．Helene を殺せるなら 2 度死んでもいいと 1116 で語っていたように，彼は Helene 殺しに命を賭けてもいいというつもりでいたはずである．それは衝動的な思いつきに過ぎなかったもしれないが，彼は Pylades の訓導を受け 1163-66 に至っても，死ぬ間際に復讐を果たしたいのだと語っていた[52]．1245 でも，命をかけてこの仕事を果たすということが 3 人共通の決意として Pylades によって語られていた．しかるに上記の場面では，Orestes 自身が攻撃されて命を落すかもしれないとしても，その剣を突刺しさえすれば確実に彼女を殺せたはずである．命がけで復讐する

は，そういうことなしに済んでいたのである．

[51] Willink, ad 1491 を参照せよ．

[52] 「私の魂を吐出しつつ敵に何がしかのことを果たした上で死にたい」(1163-64)というのは，復讐が死と同時に叶えられることを欲しているということである．それは，復讐が叶ったらすぐに死んでもいいということとも同じである．

とはまさにそういうことだったのであるが，彼は結局そのチャンスを放棄する．かくのごとく，彼においては，よく考えて固めたはずの決意もあてにならないのである．これと同様のことは，A.*Choephoroi* においても描かれていた(899-903)．すなわち，Orestes は母殺しにも肝心の所で迷いが生じて自分ひとりの意志では踏切れなかった．母殺しが正当化されうるか否かは難しい問題であるから，母殺しをためらったのは倫理的には妥当なことであろう．しかし，状況も変ってもいないのに行動の時が迫ると決意が揺らぐということは，決意の弱さの現れに他ならない．E.*El.*においてはどうだろう．Orestes が母殺しの直前にためらいを見せたか否かは何も示されていないが，殺害後の彼の言葉は苦渋に満ちている(1190ff.)．これは，まっとうな良心の呵責ではあるが，やはり母殺しの意志を貫ききることのできない彼の意思の弱さの現れだと言えよう[53]．以上のことを考えれば，思い定めた決意が維持できなくなりがちなことは，Orestes の性格でもある．そして，彼の意思の不確かさこそが，タダでは死なないという魂胆が彼の中で野放しになった理由であり，Orestes がかのように変様した根本的な理由である．そうだとすれば，変様の原因は周囲の人に劣らず，Orestes 自身の中にあるのである[54]．

＜よきもの＞への決意が脆いということこそが Orestes の本性というべきものであり[55], そしてこの劇は, 何よりもまず Orestes のそういう性質を基本にして作られている．時々の誘惑や迷いに従ってしまうことは，意志が弱ければ，むしろ誰にでもありうることだ．ここに描かれているのは，Sophokles 的な意志の硬い英雄とは違い，凡夫が意志の不確かさゆえに愚かな選択を重ねてゆくさまなのである．

６．アポロンの措置

Orestes がついに放火を Elektra と Pylades に指示すると，Apollon が突如現れてそれを制止し，思いがけない措置を講ずる．Hermione 殺しはなされず Orestes も死なずに済み，結局何もなかったかのようなことになる[56]のはよいが，彼がいわば無罪放免されるのは，神の勝手とはいえすんなりと納得できることではない[57]．そのような措置を

---

[53] S.*El.*の Orestes が母殺しについて全く躊躇を見せないのは，例外的な Orestes 像だというべきだろう．

[54] Orestes 自身の中に彼の問題行動の原因を見るという意味で，私の見解は上述の(３)の研究者たちのそれと似ていると言えるが，私は Orestes のなかに悪辣を見るのではなく弱さ不確かさを見る．Schein, 64 は Orestes の‘mental instability’を指摘している．中務, 410 も同様である．

[55] 彼が往々にして Pylades と一緒に現れ，Pylades の助言を受けながら行動することが多いというのも，このことと無縁ではない(E.*IT.*など)．A.*Ch.*では，Pylades の助言が重要な役割を果たす(900-02)．E.*El.*においても S.*El.*においても Pylades はダンマリとしてだが登場し，館中での殺害場面に立会っている．そこで Orestes がためらいを見せたか否かは何も示されていないが，彼らは，先行する A.*Ch.*が描いたイメージをあえて否定しようとはしなかったということができる．

[56] Wolff, 340 は, この劇が Orestes の神話の中でいわば parenthesis をなすものだと言当てている．

[57] Parry, 352 は，Apollon の措置が logical outcome でないと表現している．

劇の最後に盛込むことによって何が仕掛けられているのかを，これまでの考察の成果に照し合わせて考えてみよう．

Apollon は，Orestes が Hermione を殺すことをやめ，アルゴスから去ってアテナイで裁判を受けるように，そして Hermione を娶るように，また，Menelaos が Orestes にアルゴスを支配させるようにと指示し，そして神自身はアルゴス市民たちを宥めると約束するわけだが(1625-65)，なぜそのようなことになるのだろうか．

人質殺しと Orestes の自害が制止されるのは，一つには Hermione と Orestes がここで死んでは神話に反することになるからであろう[58]．また，Orestes がそのような無法な殺しをすることを Apollon や Euripides が倫理的に許さないということなのかもしれない．しかしそれならなぜ無罪放免にするのだろうか[59]．無罪放免は，Orestes がそれに相応しいという判断がどこかにあってのことなのだろうか．亡命が許されるのはもちろん，Orestes が決定的な凶行をこの劇ではまだ何一つ果していないという事実に応じてのことだろう[60]．しかし，法外な脅迫を Menelaos に向けたことや Hermione の死を含意する放火[61]を命じたことに対して何の咎めもなく Orestes が放免される，それも Orestes に対するアルゴス市民の悪感情を清算することを Apollon が請負い，しかも彼が Hermione を嫁として貰えることにもなる[62]，ということには違和感が否めない．

ここで考えるに値するのは，かの措置は Orestes のしたことに対する倫理的な裁量には無頓着に，別の理由からなされたものであるという可能性である．Apollon の措置は，この劇で起ったこと全体を，いわば，きれいさっぱり無かったことにするものだ[63]ということを考えると，まさにそのことこそが詩人の意図であったのではないかということに思い至る．というのも，Euripides は Orestes の振舞いも民会の暴走も Apollon 神の権威で帳消しにするという最後の手段があるからこそ，前途ある人物であるはずの Orestes を用いながら，しかし彼に徹底的に醜悪で愚かな振舞いをさせて，取り返しのつかなくなる手前ギリギリのところまで突っ走らせることができたと考えられるからで

---

[58] 神話では，Orestes が Hermione を娶り，のちにアルゴスとスパルタの王座を継承することになっている．

[59] S.*Aj.*における Aias も，やはり八当たり的な途方もない埋合せをしようとして Athena 女神に制止されるが，それに続く女神の処遇は対照的で，彼は死ぬほかなくなるような屈辱を味わわされる．彼はその結果，せめて自分のよき本性の証をしようとして(*Aj.* 470-78)自刃を選ぶわけであるが（吉武(2011), 29-31 参照），それはまさに，我々の劇の中で Orestes が最終的に擲ってしまうことである．Euripides は多分なにかの劇を意識して *Orestes* を作っていると思われる．

[60] Orestes は，皮肉にも，自刃にせよ誅殺にせよ果敢な行動をとらなかったからこそ救われる可能性を残していたのだと言うことができる．

[61] 館が焼け落ちるならば，刺殺されるか否かにかかわらず，Hermione は死ぬことになる．

[62] 予言のこの部分は，Orestes が Hermione を殺そうとしていたのが実は，復讐というよりもむしろ死の道連れを所望するということに他ならなかった，ということの痛烈な指摘である．

[63] nightmare というアイデアを，Arrowsmith, 110; Parry, 352; Mullens, 157 も用いている．

ある[64]．そして，Orestes がそのような振舞いをするという悪夢を観衆に見せるということには十分な意味が認められるからである．

Apollon のそのような措置は，現実界の倫理感覚をもって Orestes の転落に気を揉んだ観衆を現実界に置去りにするものである[65]．もちろん，単純に Orestes が救済されてよかったと喜ぶ人もいたであろうが，事件の帳消しが行なわれないという事態—本来はそうなるはずだった—に思いを致してあれこれ省察する人も少なくなかったはずである．Euripides はそのことを計算に入れて，Orestes に対する倫理的判断をわざとに空白にして，観衆の一人一人に任せることにしたのではないだろうか．Euripides がそう意図したというよりも，観衆はそのように導かれているのである．

もし Apollon による制止がなかったら，Hermione は殺され Orestes らも自害し[66]焼落ちる館とともに炭になるはずであった．ここで重要なのは，彼はその事態に向かって最終的に動き出したが，それはまだ実現していない段階で停止されそれ以上進まない，という状況が作りだされ，しかし観衆はその中で次に起ころうとしていた醜悪な事態のことを案じるように仕組まれているということである．我々は，Orest がこれから一線を踏越えることの痛ましさが最も感じられる瞬間でとめ置かれる．Orestes 自身の死はもとから命じられていたもので仕方ないとしても，彼の破滅の痛々しさは，「恥ずべき」な Hermione 殺しを行なって名誉までも失うことにある．しかしそれは避けようがなかったのか．もっとマシな振舞いようはなかったのか．

それを考えると直ちに，そして確かなこととして思い当たるのは，次のことである．すなわち，Hermione 殺しは Orestes 自身の迷妄によって導かれたものにすぎず，もし Hermione 殺しを自身であきらめて自害するならその方が，同じく自害するにしても確実にマシであったということだ．それは，いま再び死ぬ外ないという状況に置かれた彼が，1147-52 で Pylades の語っていた理想，あるいは 1062-63 で Orestes 自身の示していた意思に立ち戻るということに他ならない[67]. 劇はかの Pylades の言葉によって，我々

---

[64] West, 37 は，Orestes らが悪事もなさず従順に自害しようとするところを Apollon に救出されるというシナリオもありえたが，Euripides はそれを採らなかったと指摘している．そこからも分るように，Euripides は Orestes が醜悪に振舞うさまをあえて描こうとしたのである．

[65] Arrowsmith, 110 は，Orestes が救われても悪夢は残ると言う．Wolff, 356 は，現実と myth の乖離は治癒できないと言う．Mullens, 157 は，空想的状況を提示することで却って現実を強調していると言う．

[66] 自刃するのかもしれないし，焼死するのかもしれないが，いずれにせよ敵の手によらず自分たちの意志で死ぬということになる．

[67] もちろん，潔く自害すること自体，Pylades の申立てていたほどよいものかどうかは怪しい．それがカロス死と称するには足りないものであることはほとんど自明である．それであってもなお，Hermione を殺すことなしに潔く自刃するなら，名誉を守るためには死をも厭わない者であることが一応は証されるのであって，そのぶんだけマシなのだということが重要である．単純に，潔く死ぬのがいいということではまったくない．（不正な裁定にただおとなしく従うことはある意味では愚

が容易にそのことに気付くように促しているのである.

ところで，Orestes は Helene 殺しを中途放棄したも同然であったが，もし遂行していたら少しでもマシなことが望めたであろうか．Helene 殺しの是非という厄介な問題はあるが[68]，それとは切離して少し考えてみよう．Helene 誅殺を遂行したなら，大衆の称賛を得て無罪放免になり Hermione 殺しには至らなかった可能性はあるだろうが，その通りになったかどうかは全く未知数である. 目論み通りに無罪放免が得られなければ，手許の人質をどうするかをやはり自分で決めなくてはならない．埋合せとしては，Helene殺しのほうがHermione殺しよりも大義のあるぶんマシである(許容できる)といえよう．また，もし Helene 殺しの真最中に殺されるならば，誅殺の成否にかかわらず正真正銘のカロス死という栄誉が得られたかもしれない．しかしそうだとしても，Helene 殺し自体の是非ということまで考え合わせると，そうする方がマシだったかどうかは分らないというほかない．何ら確実なことは言えないのである.

また，Orestes は提案された亡命を拒否したが，もし Hermione を殺さず亡命していたらマシであったろうか．それは，Hermione 殺しという醜悪と，亡命の場合の屈辱および約束違背とのどちらがマシかという価値判断である．Apollon が前者を阻止し後者を命ずるということは劇の与えるひとつの示唆であり，Apollon の指令をまたずとも，Hermione を殺さないほうがマシであることはほとんど自明ではあるが，ではその同じ条件のもとで，亡命するのと潔く自害するのとではどちらがマシかというと，それは簡単に答えられる問題ではない.

以上から判断されるのは単純なことである．Orestes は Hermione 殺しを放棄しさえすれば，同じく自害するにしても名誉を維持することができたろう，ということだけは確実だということだ．そしてそれよりマシな展望は，何ひとつ期待しうるものとして与えられていない．彼の非は，英雄的な行動を果たさなかったことにあるのではない．埋合せ欲求に心奪われてしまったことにある．埋合せ欲求に捉われて取り返しのつかぬところまで進む前に，＜よきもの＞への意思を取戻して自ら立止まることがいかに大切かということが，劇の終りにこのような特異な方法で，観衆の一人一人に銘記される．Orestes が自刃，誅殺，人質殺しという行動を変遷した果てに Apollon の措置を受けるという展開によって，この劇は，何よりもそんな明確で実用的なメッセージを伝えていると考えられる[69]．411-10 年の寡頭政権をめぐる動乱以来，市民に渦巻いていた猜疑と

かしくもある．）

[68] 全ギリシア人のための復讐という大義はあっても殺すことは許されるのか，あるいは，ゼウスの娘を殺したらどういうことになるか等の問題.

[69] Apollon の措置の意味については，従来次のようなことが語られてきた．いたずらに泥沼にはまり込んだ状況を打開する(Spira, 140-41)；そうなったかもしれない状況を出現させることによって現実を強調し Orestes の堕落を描いている(Mullens, 157)；現実と神話の対置によりいかなる解決も不可能だということを示すものであり Apollon の出現自体が‘impossible wish’である(Arrowsmith,

憎悪と訴訟沙汰，またペロポネソス戦争で繰り返されてきた報復の応酬を見てきた当時のアテナイ市民たちは，他人事でないと感じたのではないだろうか.

結論

以上の議論全体は次のようにまとめられる．1147-52 で Pylades が言っていた想定と屋上シーンで起っている事態との符合は何のためのものか，どういう効果をもたらしているか，ということを解明するためには，まず 3 つのことをはっきりさせる必要があった.

その第一は，Helene 誅殺を勧める Pylades のスピーチの悼尾をなす 1147-52 はどのように考えればよいかということである．ここで彼がカロス死を申立てることは奇異ではあるが，それは彼が誅殺のために命をかけるという心意気の現れに他ならない．大義によって正当化される Helene 誅殺のためには命も惜しまない，という彼の潔さ(それもしいて言えば清廉な)が描き出されている.

その第二は，Orestes はそれにどういう態度で同意したのかということである．もとより彼は，死刑と判定された以上潔く自刃して εὐγένεια を証しようとしたように，名誉等を守るためには必要とあれば命も惜しまないという＜よきもの＞への意思に満ちていた．Menelaos への復讐として Helene の殺害を決意したときでも，彼のその意思は健在で，復讐を何が何でも叶えてみせるという意思は見当たらなかった.

第三の問いは，Helene 殺しに失敗したあと Orestes が Hermione 殺しを目指すのはどういうことか，ということである．Hermione を殺すというアイデアは，無罪放免されるための最後の脅迫手段でもあったが，Orestes はしまいにその可能性に見切りをつけて，彼女の殺害に踏切ろうとする．Hermione を殺すということは，誰に対する復讐というよりも，彼が死なねばならなくなったことの埋合せを，ほとんど関係ないところから奪い取ることであると言える. それは, 名誉や信義や道義を蔑にすることでもある.

以上のことから，1147-52 と屋上シーンとのあいだに設けられた符合は，Orestes が今やタダでは死なないという魂胆の虜になっている，ということを照し出すものだと解することができる．Helene を大義の枠内で誅殺することができなくなっても，Hermione を人質として捕獲したので死の埋合せがとれる，ということに気付くと，彼の中にあった＜よきもの＞への配慮がくずれてしまった．よく考えてしたはずの決意が

110-11) ; 神話と現実の乖離を表している(Wolff, 355) ; 表面上の救いによって内実での救いの無さを映し出すブラックユーモアである(Parry, 452) ; 劇の幻想を壊しこれはタダの劇なのだということを示して観衆を現実に引き戻す(Zeitlin, 337)など. これらのいずれにも私は特に反対するものではない. しかし私が考えるのは，Apollon の措置はそれまでの劇展開と相俟って，もっと具体的で現世的なメッセージを観衆に伝える役目を果たしているだろうということである．（中村, 188 は，1617 で既に二人の交渉が成功した後なので，Apollon の措置は様式化された趣向の繰返しに過ぎないと言う．しかし，Orestes がなお放火指示へと突き進むことを軽視することには賛成できない.）

脆いのである．それが彼の根本的な問題である．

その彼にApollonがありえないような無罪放免という措置を施すことにより，この劇は観衆を悪夢とともに現実世界の中に置去りにする．観衆は一人一人が自分で，Orestesの問題点を考えることを余儀なくされる．そのとき私たちは，上のような理解を得ていれば，Orestesが，やはり最後に死を受容れることにしたのなら，「恥ずべき」Hermione殺しをやめて自害したほうが，せめて名誉だけでも守ることができたのに，ということにすぐ思い至るであろう．この劇は，埋合せ欲求に狂って分別を失うことへの実際的な警告を含んでいる．それはEuripidesが当時の市民たちに宛てたメッセージであったろう．

文献表

Arrowsmith, W., Introduction to *Orestes*. In *The Complete Greek Tragedies: Euripides*, ed. by D. Green & R. Lattimore, IV. Chicago 1958, 106-111.

Burkert, W., Die Absurdität der Gewalt und das Ende der Tragödie: Euripides' Orestes. *Antike und Abendland* 20 (1974), 97-109.

Conacher, D. J., *Euripidean Drama: Myth, Theme and Structure*. Toronto 1967.

Diggle, J., *Euripidis Fabulae*, iii. Oxford 1994.

England, E. B., Wedd's Edition of the "Orestes"(review). *CR* 10 (1896), 344-46.

Erbse, H., Zum Orestes des Euripides. *Hermes* 103 (1975), 434-59.

Eucken, C., Das Rechtsproblem im euripideischen Orest. *MH* 43 (1986), 155-68.

Falkner, T. M., Coming of Age in Argos. Physis and Paideia in Euripides' *Orestes*. *CJ* 78 (1983), 289-300.

Jackson, J., *Marginalia Scaenica.* Oxford 1955.

Gow, A. S. F., On Two Passages of the *Orestes*. *CQ* 10 (1916), 80-82.

Komorowska, J., Loyalty Forsworn: an Inquiry in Euripides' *Orestes*. *Eos* 87 (2000), 39-52.

Mullens, H. G., The Meaning of Euripides' *Orestes*. *CQ* 34 (1940), 153-58.

Murray, G. M., *Euripidis Fabulae*, iii. Oxford 1909.

Parry, H., Euripides' *Orestes*: the Quest for Salvation. *TAPhA* 100 (1969), 337-53.

Pohlenz, M., *Die griechische Tragodie.* Göttingen 1954.

R. Porter, J., *Studies in Euripides'* Orestes. Leiden 1994.

Reinhardt, K., Intellectual Crisis in Euripides. In *Oxford Readings in Classical Studies: Euripides*, ed. by J. Mossman. Oxford 2003, 16-46. （初出 1957）

Schein, S. L., Mythical Illlusion and Historical Reality in Euripides' Orestes. *WS* 9

(1975), 49-66.

Spira, A., *Untersuchungen zum Deus ex machina bei Sophokles und Euripides*. Kallmünz 1960.

Steidle, W. S., *Studien zum antiken Drama.* München 1968.

Wedd, N. W., *Euripides Orestes.* Cambridge 1895.

West, M. L., *Euripides Orestes.* Warminster 1987.

Willink, C. W., *Euripides Orestes.* Oxford 1985.

Wolff, C., *Orestes*. In *Oxford Readings in Greek Tragedy*, ed. by E. Segal. Oxford 1983, 340-56. (初出 1958)

Yoshitake, S., Disgrace, Grief and other Ills: Herakles' Rejection of Suicide. *JHS* 114 (1994), 135-53.

Zeitlin, R. I., The Closet of Masks: Role-Playing and Myth-Making in the *Orestes* of Euripides. In *Oxford Readings in Classical Studies: Euripides*, ed. by J. Mossman. Oxford 2003, 309-41. (初出 1980)

丹下和彦『ギリシア悲劇研究序説』(東海大学出版会 1996). (初出 1972)

中務哲郎「『オレステース』解説」『ギリシア悲劇全集』8 (岩波書店 1990), 395-411.

中村善也「『悲劇』の終わりの『神』——エウリピデスのデウス・エクス・マキナについて——」, 中村善也ほか編『ギリシア・ローマの神と人間』(東海大学出版会 1979), 161-90.

吉武純夫「カロス・タナトスとは何か(上)」『ギリシア悲劇における死の受容についての研究』(科学研究費研究成果報告書, 2002 年), 1-32.

吉武純夫「カロス・タナトスとは何か : Tyrtaios の戦死論」『名古屋大学文学部研究論集・文学』53 (2007), 87-109.

吉武純夫「エー・カロース・テツネーケナイ : Aias の悲劇的課題」『名古屋大学文学部研究論集・文学』57 (2011), 27-45.